博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査）菅原 睦 印

学位申請者　アクマタリエワ・ジャクシルク

論　文　名　キルギス語の〈持続〉を表わす補助動詞　—jat-、tur-、otur-、jür-を中心に—

＜審査結果＞

菅原（主査）と本学の早津教授，風間教授，および林徹・東京大学教授，大崎紀子・京都大学非常勤講師の5名からなる審査委員会は，2月15日に行われた公開審査の結果，アクマタリエワ・ジャクシルク氏に博士（学術）の学位を授与することが適切であると全員一致で判断した．

＜論文の概要＞

アクマタリエワ・ジャクシルク氏の学位請求論文（本文282頁）は，全19章からなり，第Ⅰ部　序論，第Ⅱ部　本論（各補助動詞の考察），第Ⅲ部　形式的な条件により生じる意味，第Ⅳ部　結論と今後の課題　に分けられている．以下，それらの概要を紹介する．

第Ⅰ部　序論では本研究の目的と研究対象，先行研究，方法論などについて述べられている．考察の対象となっているのは，主動詞に副動詞接尾辞を介して後接する補助動詞 jat-, tur-, otur-, jür-の用法である．４つの補助動詞の意味用法を探る手がかりとして，これらと結合する主動詞を意味的な観点から「動作動詞」，「変化動詞」，「状態動詞」，「内的感情動詞」の４つに大きく分類することが示される（第５章）．またここで用いられた言語資料の選定方法や用例数も紹介されており，それによれば検討された用例数は全部で4224に達する（第７章）．

第Ⅱ部　本論は，まず動詞 jat-, tur-, otur-, jür-が本動詞として用いられた場合の意味—それぞれ「横たわる」，「立つ」，「座る」，「動く，行く」におおよそ対応する—を説明したのち（第８章），これらそれぞれの補助動詞としての用法の分析に移る．主動詞と補助動詞をつなぐ働きをする副動詞接尾辞には-(ï)p と-a/-y の２種類があるので，４つの補助動詞との組み合わせは計８通りが予想されるが，接尾辞-a/-y＋補助動詞 otur-の用例は見出されなかったため，全部で７通りの組み合わせが順に検討されている．その際に，主動詞の意味的なタイプ（さらに細かく分類されている）や，文中に現われる副詞句の働きなどに

よって，それぞれの補助動詞の機能がどのように規定されているかが，豊富な用例に基づき示されている（第 9 章から第 12 章）．この分析に基づき，主動詞の意味的タイプによって用いられる補助動詞に一定の偏りがあることや，補助動詞が表わす文法的な意味が「動作の持続」から「動作のくりかえし」や「変化の結果の持続」へと移行する条件などが論じられている．

「形式的な条件により生じる意味」と題された第Ⅲ部では，補助動詞が副動詞接尾辞を伴って用いられる場合（つまり補助動詞が副動詞節を構成する場合）（第 13 章），主動詞が否定接尾辞を含む場合（第 14 章），補助動詞が否定接尾辞を含む場合（第 15 章），主動詞が受動接尾辞を含む場合（第 16 章）のように，第Ⅱ部の議論とは異なる切り口からそれぞれ検討が加えられている．
第Ⅳ部　結論と今後の課題　は本論文全体のまとめである．ここまでの考察を踏まえて，主動詞の意味的な大分類ごとに各補助動詞の用例数を示した表（表 27）や，主動詞の意味的なタイプと各補助動詞との組み合わせにより生じるさまざまな文法的意味の分布を表わす表（表 28 から表 33）が提示されているのに加えて，各補助動詞の本来の語彙的な意味との関係も論じられている．

＜審査の概要＞

キルギス語を含むチュルク諸語の補助動詞は，これまでにも研究者によって取り上げられてきたテーマであるが，母語話者によるこれほどの大量のデータの分析を踏まえた論考は他に例がなく，その意味でアクマタリエワ氏による本論文は大変貴重なものである．分析にあたっては，母語話者であることの利点を十分に生かしながらも，内省による文の適格性の判定に安易にたよることを控え，収集した用例に基づいて慎重に議論を進めている．このようにして提示されたデータはさまざまな組み合わせの可能性を網羅しており，強い説得力をもつものとなっている．特に，主動詞の意味的なタイプと用いられる補助動詞の種類およびそれらによって表わされる文法的な意味との間に一定の関係が存在することは，このような地道な分析を通じてのみ見出すことができたものであり，本論文の独創的な成果として高く評価されるべきである．例えば，動作動詞は 4 つの補助動詞のすべてと組み合わさり，また jat-, tur-, jür-の 3 つが用例数でほぼ拮抗しているのに対し，変化動詞や状態動詞の場合には補助動詞 tur-との組み合わせが大きな割合を占めていることが示される．あるいは，移動動詞（動作動詞に分類される）が異なる補助動詞と結びつくことにより，動作の繰り返し／動作の持続／動作の結果の状態といった異なる局面を表わすことが指摘される．

(...) tïnbay **öt-üp jattï.**

「（電車が）途絶えることなく通っていた」（動作の繰り返し）

tïšta birpas **bas-ïp turdu.**

「（彼は）外で少し歩いていた」（動作の持続）

(...) azïr da **bar-ïp turam.**

「（私はそこに）今も行っています」（動作の繰り返し）

mïnda kačïp **kel-ip oturat.**

「（彼は）ここに逃げてきている」（動作の結果の状態）

同様に変化動詞においても，変化の進展と変化の結果の状態という相違が見られる．

tömön **tüš-üp jatat.**

「（水面が）下降している」（変化の進展）

čekeŋ **ïsï-p turat.**

「君の額が熱くなっている」（変化の結果の状態）

tartïluu küčü **azay-ïp oturat.**

「（距離が増えるとともに）引力が弱まっていく」（変化の進展）

第Ⅲ部で検討されている形式的な条件との関係も，従来考察の対象となることの少なかった観点であり，本論文でもいわば補足的な扱いにとどまっているが，今後のさらなる発展が大いに期待される内容である．

その一方で，審査委員からは特に論文としてのまとめ方という点でいくつか改善の余地も指摘された．例えば，各補助動詞の用法を検討するにあたってなんらかの既存のアスペクト論の枠組みを採用したり，「文法化」という概念をめぐってもっと踏み込んだ議論を展開することもできたであろう．また動詞を意味的なタイプに分類したり，それぞれの副動詞の文法的な意味を判定する際に用いられた客観的な基準が明確に示されたならば，論文全体のわかりやすさや説得力がより増したに違いない．補助動詞を含まない用例との比較対照が十分に行われていない点も問題とされた．得られた数量的なデータに対して，残差分析のような統計学的手法をとることで，補助動詞の分布を一層効果的に示すことができるのではないかという示唆は，同時に本論文の分析結果の妥当性を裏付けるものでもあることが確認された．いずれにせよ，本論文が今後のチュルク諸語の補助動詞やアスペクト研究に対し重要な基本文献となることは疑いない．また質問に対する受け答えからは，著者がこの問題に対しこれまで誠実に取り組んできたことや，残された問題点や今後改善すべき点をしっかり認識していることがよくうかがえた．以上，提出論文と最終試験の結果により，審査委員会は全員一致でアクマタリエワ・ジャクシルク氏に博士（学術）の学位を授与することが適切であると判断した．